

モンゴル民族音楽の普遍化への試み

—ジャラム・ハル（チョーイドグ作曲）のピアノ編曲を例に—

石井 哲夫¹

An Attempt to Universalize Mongolian National Music

—An Example of Piano Arrangement by Jaram Hal(composed by Choidogu) —

Tetsuo ISHII

abstract

National music is just the thing of that race in its native form. In order to be able to be accepted by other nation, it is necessary to borrow and transform the style of music that is widespread throughout the world.

Many of Mongolia's musical instruments represent how a horse is galloping by the operation of a quick bow of a Morin khuur. If this is a piano, it will be replaced by a single hit.

By expressing a national musical elements in the style of Western music and instruments, it is possible to make it a world music.

キーワード：民族音楽，西洋音楽，馬頭琴，ピアノ，国民楽派，普遍化

Keywords：national music, Western music, morin khuur, piano, nationalist school, universalize

0. 序論

民族音楽（national music）とは、特定の国民・民族の音楽全般を指す。それには民間伝承により継承・伝播される民俗音楽（folk music）の他、その国民・民族固有の宗教的儀式に用いられる音楽、その国民・民族の芸術音楽家の創作による作品も含まれる。

また民族音楽はその地域の自然、歴史、産業、生活習慣、伝統芸能、舞踊等の影響を受け、形成されている。

それ故、それらはそのままの形ではその国民・民族のものでしかなく、他国民・他民族に受け容れられるのは難しい。かつて国民楽派^{(*)1}の作曲家たちは民族音楽のリズム、旋律、楽器、奏法などに含まれる民族的要素をヨーロッパの伝統的なスタイルと融合させることにより、それまであまり知られていなかったヨーロッパ東部・北部の音楽をヨーロッパ伝統音楽の中心地であるドイツ、イタリア、フランスにも知らしめた。

ヨーロッパ音楽の伝統的な様式は、日本、アジア諸国でも音楽（芸術音楽、娯楽音楽を問わず）のスタンダードになっていることは疑う余地はない。本稿で取り上げるモンゴル^{(*)2}でも学校教育における音楽は、1～6年生は自国の民俗音楽に基づく内容が中心だが、7年生（日本の中学校1年生に相当）以後は西洋音楽が中心になる^{(*)3}。また大都市の劇場等がもつ馬頭琴の大人数合奏（馬頭琴オーケストラ）は西洋音楽のオーケストラの演奏形態を採り入れたものである（図1）。そして図2に示すように、国立歌劇場ではロシア、ヨーロッパのオペラ、バレエなど舞台芸術作品がさかんに上演されている。

これらのことから、現在のモンゴルにおいては民俗音楽のような伝統的な音楽は保持されているもののヨーロッパ音楽の様式や、ヨーロッパ芸術音楽作品がかなり浸透していると考えられる。よってモンゴル民族音楽を、他国民・民族にも受け容れられ親しまれるものにする^{(*)4}ためには、その音楽中の民族的要素を生かしつつ、ヨーロッパ音楽のスタイルを用いて再編する（国民楽派の手法に学ぶ）のが最適と考えた。

¹ 富山大学人間発達科学部



図 1. 西洋音楽の演奏形態による
民族楽器アンサンブル



図 2. ウランバートルの国立歌劇場上演予告看板

1. モンゴル民族音楽概観

本研究ではサンプルとしてモンゴルの音楽作品のひとつである「ジャラム・ハル」(後述)のピアノ独奏用への編曲を行う。この節ではこの編曲で根拠としたモンゴル民族音楽の概要について主として楽器、音階の点から述べる。

1) 楽器

この曲のピアノ独奏編曲にあたり、筆者がモンゴル渡航時に収録してきたものの他に、インターネット上に公開されているものなどいくつかの演奏を参考にしたが、馬頭琴(Морин хуур, モリンオール)独奏のもの、または馬頭琴を含む合奏のものがたいへん多いことに気付く。馬頭琴はこの曲に限らずモンゴル民族音楽全般(バヤン・ウルギー県など西部地域を除く)に登場する。したがってモンゴル民族音楽の特徴を普遍化する目的でこの編曲を行なうのなら、この民族楽器について概観しておく必要がある。

馬頭琴(Морин хуур, モリンオール)^(*)5)はモンゴルの代表的民族楽器である(図 3)。木製の胴に竿があり、これに張られた弦を馬の尾の毛で作られた弓で擦って音を出す、という点では、バイオリン・チェロと似ている。弦は見かけは 2 本だが実際には



図 3. 馬頭琴(左)とドンブラー(右)

一本の弦が緒止めで折り返されている。これはカザフの民族楽器のドンブラー(図 3)も同様である。このことから楽器の分類としては、ヴァイオリン属・ヴィオール属よりリュート属に近いと考えられる^(*)5)。馬頭琴はモンゴルだけでなく中華人民共和国内モンゴル自治区でもよく見かける楽器である。モンゴルの楽器と内モンゴルの楽器には構造上と調弦の方法に若干の違いがある。構造上の違いとしては、糸巻部分があげられる。モンゴルの楽器の糸巻部分はチェロのそれと同様の構造であるが、内モンゴルの楽器はギターのようなギアで巻き締めるようになっている(金属加工技術が稚拙だった時代には、動物の骨などが使われたと思われる)。

調弦方法は図 4 に示すように、モンゴル、内モンゴルの楽器共に 2 本の弦が開放弦の時に完全 4 度になるように合わせるが、この時、モンゴルでは(低い方から) F・Bb、内モンゴルでは G・C とするのが普通である。また演奏曲によっては Eb・Bb(モンゴル)、F・C(内モンゴル)という調弦方が採られることもある。日本の三味線でも曲により本調子・二上り・三下りという調弦方が使い分けられるのと同様に似ている。



図 4. 馬頭琴の調弦方法

馬頭琴はモンゴルの心といわれ(図 5)、現在モンゴル政府はゲル(遊牧民の移動式住宅)の家庭全戸に馬頭琴を持たせるという施策をとっている。



図 5. モンゴル国立民族博物館の楽器展示
説明板に「馬頭琴はモンゴルの心」とある^(*)6)

もうひとつ着目した楽器は、洋琴（モンゴルでの呼称はヨーチン）である。洋琴は、響板の付いた箱型ボディに多数の弦が横向きに張られ、これを竹製のマレットで叩いて演奏する（図 6）。



図 6. モンゴルの洋琴（ヨーチン）

見た目も奏法もサントゥール、ダルシマーやツィムバロン^(*)7)とよく似ている。また楽器の構造的に、弦で発音された音を響板とボディ増幅するのはピアノと共通しているためか、音色的にはピアノに近いものが感じ取れる。同じ楽器は中国、朝鮮半島にもある（中国では揚琴＝ヤンチン、朝鮮では양금＝ヤングム）。また日本にも伝わり江戸中期～明治初期には明清楽で使われた^(*)8)。

馬頭琴、洋琴共に同音連打に強く、後述のようにモンゴル民族音楽によく顕れる馬の疾走姿を表現するのに適した楽器である。

2) 音階・音組織

一般的にモンゴル音楽によくみられる音階は、西洋音楽の長音階から第 4・7 音を抜いたヨナ抜きと短音階から第 2・6 音を抜いたニロ抜き音階が多いとされている（図 7-1・2）。ただし、カザフ人が多い西の地域では西洋音階に基づく音楽も多いこと^(*)9)、極東地域の音楽でも西洋音楽の短音階から第 4・7 音を抜いたもの（図 7-3）も見受けられるとニロ抜き音階による歌はブリヤート族^(*)10)が多数居住する

ドルノド県北部にも数多くあるので、ヨナ抜き音階・ニロ抜き音階がモンゴル民族音楽の特徴である、と結論付けるのは現段階では性急である。

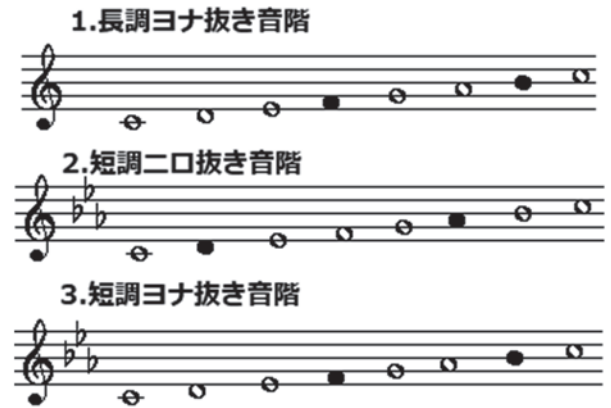


図 7. モンゴル音楽によくみられる音階

ただ、モンゴル（特にウランバートル近辺）でラジオから流れてくる音楽や、若いアイドルグループの曲にもヨナ抜き音階・ニロ抜き音階で作られた音楽が多いこと、小学校音楽の教科書に掲載されている歌唱教材にもこれらの音階で出来ている曲が多い^(*)11)ことから、この 2 つの音階が創り出す旋律が多くの人にとって親しみやすい音楽であることは推察できる。これらの音階に共通する点は、ヨナ抜き短音階（図 7-3）の 1 箇所を除き隣接する音同士に半音がないことである。

3) 歌唱

モンゴルの伝統的な歌唱として知られているのは **Уртын дуу**（オルティンドー、長い唄と訳される）である。長さが大変長い 1 音と細かく動く 2 音（短 3 度のことが多い）が特徴的である。これらが連続する場合でも 1 回のプレスで歌われることが殆どであり、その結果聴いている者には重音の持続のように聞こえる（図 8）。



図 8. オルティンドーによく顕れる音の動きのモデル

オルティンドーの演奏形態は歌い手 1 人＋楽器 1 人（馬頭琴など持続系が多い）が殆どで、歌と同じ旋律を楽器がわずかに遅れて追従してゆくのが特徴的である^(*)12)。

2. ジャラム・ハル（жалам хар）について

ここでは本研究でサンプルとして取り上げる楽曲ジャラム・ハル（жалам хар）について述べる。

この曲はモンゴルの作曲家チョーイドグ（Чойдогийн）の作品である。馬が疾走する姿を表した踊りのための音楽であり、馬頭琴オーケストラ版の他に馬頭琴とリンベ（モンゴルの民族楽器の横笛）の重奏、馬頭琴独奏など様々な編曲があり、モンゴルで最も愛好されている曲の一つである。

曲はA→B→Aの三部形式、Aの部分は図11に示すリズムが多用されているが、これはモンゴルで馬を表した音楽によく見られる特徴である（図9・10）。



図9. 馬を表したモンゴル音楽によくみられるリズム



図10. 別の曲「天馬」の例（筆者採譜）

旋律の面ではAは図11で示したリズムに乗せた上行型でチンギス・ハーンの率いた騎馬部隊の進軍のごとく、Bはゆったりしたリズムと下行型の旋律で広大な草原のごとく、Aとのコントラストをなしている（図11）。

旋律に用いられている音階は前述の短調のニロ抜き音階（図7・2）である。

また和声的には（西洋音楽の和声学でいう）T（トニック）が中心でありD（ドミナント）が入ると考えられる部分も第7音が半音上がる「導音」とはならず、西洋音楽のような響きにはならない（図12）。



図11. 主要旋律（全曲は付録参照）



図12. 西洋音楽の和声（左）と
この曲に顕れる和声（右）

以上の観点より、この曲はリズム、旋律、和声面においてモンゴル民族音楽の様々な要素を生かしつつ、楽式的には三部形式で、主要な2つの旋律が「動」と「静」でコントラスト付けされるなど西洋音楽の様式が採られており、原曲自体がすでに国民楽派の手法によってモンゴル民族音楽の普遍化を試みたものと言える。

3. 民族音楽の普遍化のためにピアノ独奏への編曲を採択することについて

本研究で実際に行なったことは前項のジャラム・ハルのピアノ独奏用への編曲である。本研究の目的は民族音楽の普遍化である。ここではその目的のために、なぜピアノ独奏という演奏形態を採択したのかについて述べる。

1) 演奏部（演奏装置）と演奏性能から

図13に示すように、ピアノの演奏装置（奏者が直接操作する部分）は鍵盤であり、楽器に向かって左方は低音部、右方は高音部になるように並んでいる。通常これを両手を使って演奏する。したがって1人の演奏者によって、図14のように、主旋律、副旋律、ベース音、内声（和音伴奏）を同時に奏することが可能な楽器である。つまり編曲によっては、多人数合奏（オーケストラ、室内楽等）のための音楽もピアニスト1人で演奏可能である。

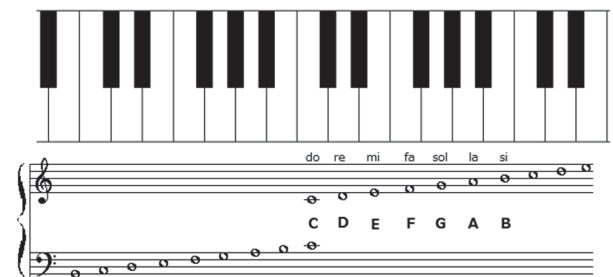


図13. ピアノの鍵盤の配置



図 14. ピアノ独奏の例（筆者編曲）

2) ピアノの普及度から

ピアノは現在世界中に普及している楽器である。本研究の題材としているモンゴルでも、音楽専門学校にはピアノ専攻コースがある（図 15）。



図 15. 万景台学生少年宮殿（左）^(*)13) とウランバートル・コンセルバトアール（右）^(*)14) のピアノ・レッスン室

我国では楽器演奏を趣味とする者の数は図 16 のようになっている。図 17 はその趣味のために年間にかけた時間である。総務省統計局が平成 28 年に行なった「10 歳以上の人が過去 1 年間に行なった文化芸術活動に関する主な趣味・娯楽」についての調査によると「楽器の演奏」は男 8.7%，女 13.0%と「CD・スマートフォン等による音楽鑑賞」の男 49.0%，女 48.9%には遠く及ばないが、財団法人ヤマハ音楽振興会が 2006 年に行なった調査（男 1019 人，女 981 人，計 2000 人対象）では「演奏できる楽器はありますか」という問いに対し、「はい」と回答した者にさらに演奏できる楽器を問うたところ「ピアノ」という回答が 20 代では女 71%，男 40%，60 代以上では女 50%，男 10%となっている（図 18）。これらのことから、少なくとも我国では音楽学習者・音楽を趣味とする者にピアノが占めるウェイトが高いと推測できる。

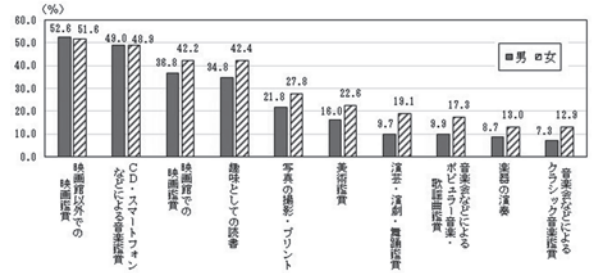


図 16. 10 歳以上の人が過去 1 年間に行なった文化芸術活動（平成 28 年総務省統計局）

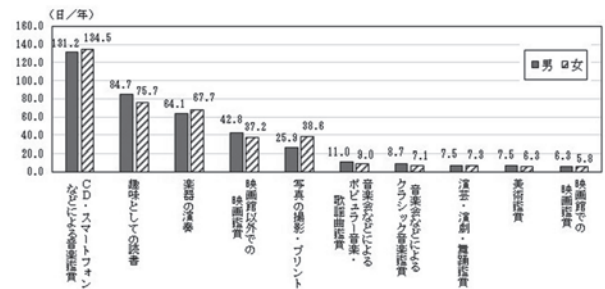
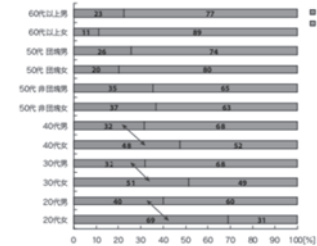


図 17. 10 歳以上の人が過去 1 年間に文化芸術活動にかけた時間（平成 28 年総務省統計局）

Q11: あなたには演奏できる楽器がありますか？



Q11-2: (演奏できる) その楽器は何ですか？ (複数回答)

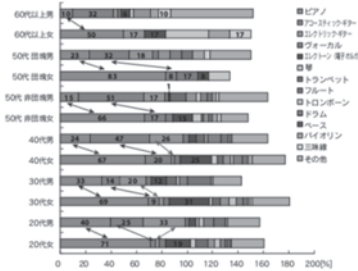


図 18. 演奏できる楽器（2006 年財団法人ヤマハ音楽振興会）

以上より、ピアノは

- ①演奏者が 1 人いれば独奏が可能な
- ②世界中の音楽家・音楽愛好者に普及している

楽器であり、ある民族音楽を普遍化するには、そ

の音楽をピアノ独奏で演奏できるように編曲するのが最適と考えた。またこのことにより、ある民族でその民族楽器は演奏しないもののピアノ演奏能力はある音楽家・音楽愛好者が自国・自民族の音楽を他国・多民族に伝達する手段を持ち得るということにもつながる。

4. ジャラム・ハルのピアノ独奏への編曲

以上の考察結果から、この曲をピアノ独奏用に編曲するにあたって考慮した点は次の通りである。

本研究では、ある民族音楽を普遍化するのに国民楽派の作曲家が行なった方法を探り入れることを基本的な考えとしているが、国民楽派の手法が全面的にこの目的に叶うとはいえない。民族音楽の普遍化を、他民族にも受け容れられる音楽を作るだけではなく、出来上がった音楽をその民族にも受け容れられるようにするためには、元の音楽を（使用楽器の変更などはあったとしても）そのまま使う部分があった方がよいと考えた。これに沿って、原曲への手の入れ方を次のとおりとする。

ア) 原曲は図 19 に示すように前奏→A×2→B×2→A×2 という構成（曲の流れ）になっている。参



図 19. ジャラム・ハル原曲（筆者採譜）

考にした演奏では前奏が省略されたものはなかったことからこの前奏は曲の構成上（表現上）重要な役割を持っているものと思われるのでそのまま使用することとする。またA、Bの部分とも1回目は、ほぼ原曲そのまま（原曲は単旋律）、リピート時は西洋音楽のピアノ曲の手法（右手旋律+左手伴奏）を使うこととした。

イ) 原曲の特徴である馬の疾走姿を表していると思われるリズム（図 9）は出来るだけ活かす。原曲ではこのリズムは同音保続で出てくるが、これはピアノならかなりの演奏技術を要するものの同音連打で表現可能である。但し馬頭琴のような擦弦楽器ならこれをレガートで奏することが出来るが、鍵盤楽器であるピアノでは困難である。この点については図 20 に示すアーティキュレーションで妥協せざるを得ない。



図 20. 前奏部

ウ) 右手で旋律を、左手で伴奏というパターンでは、西洋音楽の和声の響きは極力避ける。馬頭琴は元々弦が二本なので、バイオリンやチェロのように素早い弓操作で擬似的に三音四音を同時に出すことはできない。したがってピアノで馬頭琴の音を模擬する場合、伴奏部（左手）の音は二重音までになる。その時、馬頭琴の調弦で二本の弦の音程が完全4度、完全5度になるようにされることが多いことを考え合わせ、西洋音楽の和声学でいう第三音を省いたものを用いるようにした（図 21）。これにより西洋音楽の楽器であるピアノで演奏されるものの、和声的には西洋音楽的な響きではなく、モンゴル音楽の響きが醸し出される。



図 21. 第 3 音を極力省略した左手伴奏形

Bはオルティンドーの響きを意識した。原曲は舞曲なので、参考にした演奏ではこの部分も **Tempo Giusto** で演奏されることが殆どだが、この編曲では 1 回目は両手のユニゾンで **Tempo Rubato**、リピート時は **Tempo Giusto** で、西洋音楽の対位法的技法を用いて音の広がりを作り出した（図 22）。但し対旋律は極力短調ニロ抜き音階（半音での順次進行がない）によるものとした。



図 22. B のリピート部

Aが回帰した後（A'とする）、原曲では最初のAと同じことを繰り返すが、様々な楽器で構成される馬頭琴オーケストラと違い、楽器の音色が 1 つしかないピアノ独奏では原曲のままでは聴いていて冗長さ是否めない。A'では 1 回目はAのリピート時（図 21）と同じ、2 回目はA・B 2 つの主題を同時に奏する（ボロディンが交響詩「中央アジアの草原にて」で用いた方法）。この編曲だと曲の最後はフォルテの **tutti** で終わるような曲調になるが、原曲では主音のみで **dim.** で終わる。作曲家の意図としては騎兵隊や商人がジャムチ^(*)15) を発つところを表したものだろうか、これは原曲のまま用いることにした（図 23）。



図 23. A' から終結部

以上の考察に基づき、編曲した楽譜を付録に示す。

4. 結語として

拙論では、ある民族音楽を普遍化するのに国民楽派の作曲家が行なった方法を採用入れることを基本的な考えとしてきた。しかしながら国民楽派の手法が全面的にこの目的に叶うとはいえない。前述のように国民楽派の手法は、題材とする民族音楽から他の民族の音楽にない特徴を抽出し、それをヨーロッパ伝統音楽のスタイルで再編することである。それによりたしかにその民族音楽（のもつリズム、旋律の特徴）はより多くの人々にとって親しみやすいものになる。ただそのために作られた作品は題材となった民族にはどのように聴こえるだろうか、という問題が残る。今後の課題として、今回ピアノ独奏化したこの曲を実際に演奏し、聴いた者がモンゴル音楽に親しみを感じられるかどうか、また機会があればモンゴルの音楽家・音楽愛好者からの評価も得たいところである。また今回題材としたジャラム・ハルはチョーイドグによる芸術音楽作品（芸術音楽家による創作）であり、モンゴル民族音楽ではあるが民俗音楽ではない。この方法で民俗音楽（芸術音楽ではなく民間伝承の音楽）を普遍化することは可能なのか、さらにモンゴル民族音楽そのものについても、音階の構成音だけでなく、モンゴル語の発音やアクセントと音の動きの関連についても調べる必要があるが、それには現在収集した音楽だけでは曲数、収集地域、どちらの面からもデータ不足である。次のモンゴル渡航時にはこれらの課題に取り組む所存である。

5. 謝辞

編曲と執筆にあたり、モンゴルの馬頭琴奏者の Araanz Bat-Ochir (アラーンズ・バトオチル) 氏、洋琴奏者の Altanjagal (アルタンジャガル) 氏、ヤトガ (モンゴル琴) 奏者の Egelhand Ider (エゲルハンド・イデル) 氏のご協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

【注】

- *1) 拙論では国民楽派を 19 世紀半ば～末にかけて主にロシア (帝政時代)、ヨーロッパの北部・東部において、ヨーロッパ音楽の伝統にとらわれず自国・自民族の音楽の要素を素材とした音楽作品を作っていた作曲家を指すものとし、ヤナーチェク、バルトークなど近代の民族主義の作曲家は含まないものとする。
- *2) モンゴルという呼称は国名ではなく、民族の名称であり、国名はモンゴル国 (Монгол Улс, モンゴル・オルス) であるが、拙論ではとくに混同を避ける必要がある場合を除き、民族名も国名もモンゴルと記す。
- *3) モンゴル国小学校における音楽の授業 富山大学人間発達科学部紀要 第 9 巻第 2 号 147-149 頁 (2015)、モンゴル国小学校における音楽の授業 (2) 富山大学人間発達科学部紀要 第 11 巻第 3 号: 125-129 頁 (2017) で報告
- *4) 拙論ではこのことを「普遍化」とよぶ。
- *5) アラビアの胡弓類の一種という考え方も存在する。モンゴルは西側がカザフスタン、中東地域と接しているため、その可能性も全くないとはいきれない。
- *6) 国立大学、公立学校の学長 (校長) 室・応接室、県庁・市役所のロビーには必ずといっていいほど馬頭琴が飾られている。但しこれらの中には演奏不可能な装飾用のものもある。
- *7) サントゥールはイランの打弦楽器、ダルシマーはツィター属打弦楽器の総称である。ツィムバロンはハンガリーを中心とする東ヨーロッパでみられる打弦楽器である。
- *8) 洋琴についてはサントゥール、またはツィムバロンがモンゴルに渡ったのが原型というのが一般的に知られている説であるが、同様の楽器は中国、朝鮮半島にも存在する。かつてモンゴル帝国はそ

の領土をカザフスタンからヨーロッパ東部まで含めていたこと、また元寇の頃は朝鮮半島まで領土拡大していたことを考えるとどちらからどちらに渡ったのかについては正確なところは不明である。

- *9) バヤン・ウルギー県の県都ウルギー市は居住人口の 90% がカザフ人であり、学校教育もカザフ語で行なうことが認められている。
- *10) ブリヤート共和国はロシア連邦を構成する共和国であるが、ブリヤート族はモンゴル民族のひとつである。
- *11) 石井哲夫 モンゴル国小学校における音楽教育 ～第 3・4 学年教科書の内容からの考察～富山大学人間発達科学部紀要 第 13 巻第 1 号: 27-38 頁 (2018) で発表
- *12) 日本の追分・馬子唄と共通するものがある、といわれる所以である。
- *13) 朝鮮民主主義人民共和国の教育施設、芸術、スポーツ、科学に優れた才能をもつ子供のための英才教育を行なっている。
- *14) 小学生の年齢から入学できる音楽専門学校。通常の小学校の学習内容に加え、音楽専門教育が行われる。音楽の他、ダンス、バレエのコースもある。
- *15) ジャムチとは宿場のことである。チンギス・ハーンのとった施策のひとつに都から地方へ向かう街道の整備があり、その途中の村・集落にジャムチを置き、物流や兵力補充の拠点とした。

【参考文献】

- 小泉文夫 1982『民族音楽～アジアの隣人たちの音楽を中心に～』東京: 旺文社。
- 白石典之 2017『モンゴル帝国誕生～チンギス・カンのを都を掘る』東京: 講談社。
- 戸田邦雄 1957『音楽と民族性』東京: 音楽之友社。
- H. ライヒテントリット 1959『音楽の歴史と思想』服部幸三 (訳) 東京: 音楽の友社
- J. ローソン 1975『フォークダンス』松本千代栄 (校閲)、森下はるみ (訳) 東京: 大修館書店

【参考楽譜】

- 横田和子 1999 はじめての馬頭琴～音の遊牧世界 小島美子 (監修) 東京: 音楽之友社

付録 ジャラム・ハルのピアノ独奏版

ж а л а м х а р

Чойдогийн作曲

(石井哲夫 編曲)

Largo

Allegro con brio ♩=132

f pesante

sfp leggiere

simile

The image displays a musical score for the song "The Rose Tree". It consists of six staves of music, all written in treble clef with a key signature of two flats (B-flat and E-flat). The first staff begins with a dynamic marking of *mf* (mezzo-forte). The second staff contains a single measure with a whole note. The third staff contains a single measure with a whole note. The fourth staff contains a single measure with a whole note. The fifth staff begins with a dynamic marking of *pp* (pianissimo). The sixth staff begins with a dynamic marking of *f* (forte). The music is written in a style that suggests it is for a piano or a similar instrument.

P sempre leggiero

f molto cantabile

mp

mf







Tempo I





ff sonare

subito P e leggiero

piu cresc.

sempre leggiero



f

pesante



cresc. molto



ff subito p



perdendosi ma non rit.

(2019 年 10 月 21 日受付)

(2019 年 12 月 18 日受理)